

令和元年6月11日現在

機関番号：13501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02400

研究課題名(和文) 水上勉自筆資料の総合的調査による研究基盤形成

研究課題名(英文) Formation of research infrastructure through comprehensive research on MIZUKAMI Tsutomu's autograph materials

研究代表者

大木 志門(OHKI, Shimon)

山梨大学・大学院総合研究部・准教授

研究者番号：00726424

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題の成果は、純文学と大衆文学の間を越境的に活躍し、第二次世界大戦後の文壇で極めて重要な位置を占める作家・水上勉(1919-2004)の旧蔵資料を調査・分析し、その価値を明らかにしたことにある。

長野県東御市の水上勉旧宅に保管されている約5000点の自筆資料のうち、作品の原稿をはじめ、著名作家や編集者・文化人たちからの書簡や、出版資料など約1700点の資料整理・分析を行った。この結果、これまで本格的に行われていなかった水上文学についての研究はもとより、戦後の文壇の成立や、大衆小説や純文学などの文学ジャンル形成の問題を考察することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題の第一の成果は、埋もれてしまう可能性があった文化的に重要なコレクションを整理・調査し、その価値を明らかにすることができたことにある。

また、その作業を通して、これまで存在の重要性が認識されていながら研究が進んでいなかった水上勉の文業の全体像を明らかにすることができた。そのことは、作家個人の研究に資するだけでなく、第二次世界大戦後のわが国の文化状況を総合的に考察するための材料を提示することになった。

研究成果の概要(英文)：The result of this research project is to investigate and analyze a set of materials owned by MIZUKAMI Tsutomu (1919 -2004), who wrote across the border between main literature and popular literature and played an extremely important role in the literary world after the World War II, and to clarify its value.

Of about 5000 items in MIZUKAMI Tsutomu's house where he lived in his later years in Tomi, Nagano Prefecture, we compiled and analyzed about 1700 materials, including manuscripts, letters from famous authors, editors, and cultural figures, and published materials. As a result, it was possible to study not only about MIZUKAMI's works, which had not been progressed, but also the establishment of literary circles after the war and the formation of literary genres such as popular literature and main literature.

研究分野：日本文学

キーワード：日本文学 水上勉 文壇 戦後文学 自筆資料 原稿 書簡 出版

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

水上勉は、『フライパンのうた』(1948年)で文壇にデビューし、しばらくのブランクの後、社会派推理小説『霧と影』(1959年)で二度目のデビューを飾り、その後、直木賞受賞作『雁の寺』(1961年)をはじめ、『五番町夕霧楼』(1963年)『越前竹人形』(1963年)などの中間小説、『海の牙』(1960年)『飢餓海峡』(1963年)などの社会派推理小説、『寺泊』(1977年)などの私小説的純文学、『金閣炎上』(1979年)などのノンフィクション、『一休』(1975年)『沢庵』(1986年)などの仏教評伝、『ブンナよ、木からおりてこい』(1980年)などの児童文学、『若狭』(2000年)などの紀行文学、さらに演劇など多ジャンルに亘って創作を行った。また長く直木賞と芥川賞の選考委員を務め、2004年に没するまで常に文壇の第一線を歩んだ稀有な作家であるが、その研究はようやく緒に就いたばかりで本格的な研究書も存在しないのが現状であった。

その水上勉の旧蔵資料が、彼が晩年を過ごした長野県東御市の旧宅に保管されていることがわかった。事前調査の結果、決定稿・未定稿をあわせた多数の作品の原稿をはじめとして、著名作家や編集者・文化人たちの書簡や、旧蔵書・遺品、出版資料、演劇資料などが膨大に存在することが判明した。その大部分は整理されておらず、全体量さえ明らかではなかった。これらを調査・分析することにより、これまで手付かずであった水上勉の作家研究はもとより、水上の存在を軸にしながら、戦後文壇の形成や、そこにおける文学ジャンルの拡散・多様性の問題等を考察することができると考えた。

2. 研究の目的

本研究課題が調査対象とする水上勉の旧蔵資料は、量的に類例のない資料群であると同時に、質的にも注目すべきものである。それらを整理し、調査・分析することは、戦後文壇の代表的存在である水上勉の研究に大きな進歩をもたらすであろうことはもちろん、近年活性化している戦後文学研究全体にとって意義は大きいと考える。

本研究の目的には、以下の三つの柱がある。

水上勉の作家像の確立

宇野浩二門下の私小説作家であるとともに、松本清張と肩を並べる社会派推理作家、さらには中間小説から仏教文学、児童文学など多ジャンルにまたがって活躍し、障害を持った娘の存在から社会福祉への視点や竹人形を用いた人形劇、晩年のコンピュータへの強い興味等々、幅が広く多才であるゆえにかえって見えづらくなっていた作家像に輪郭を与えることを試みる。今回の調査をきっかけに、生前に2度の全集が刊行されているものの完全な著作目録も完備していないこの作家の仕事の概観できるようにすることを試みる。

水上勉原稿を用いた生成論的研究

作家がどのように作品を作り上げてゆくのかを、水上勉の原稿を題材に検証する。近年、たとえば松沢和宏『生成論の探究 テキスト・草稿・エクリチュール』(名古屋大学出版会 2003)、『近代文学草稿・原稿研究事典』(八木書店発行 2015)など、生成論の立場から作家の原稿を用いた研究が進展している。膨大に残された水上の原稿の存在は、この分野の研究のさらなる可能性を開くはずである。

水上勉宛書簡を通じた戦後文壇の研究

つねに戦後文壇の中心にあった水上勉宛の諸作家・編集者・文化人からの書簡は、戦後文壇と出版ジャーナリズムの現場を映し出す一級資料であり、その調査・解析から戦後文学の編制と変容、あるいはその文壇的ネットワークの存在が明らかになるのではないかと。特に近年、水上に先立ち、社会派推理小説の分野で一時代を築いた松本清張について研究が進んでいる。これまでの文学研究では手薄であった戦後のジャンル小説の研究についても、水上勉資料の存在は資するところが多いと考える。

3. 研究の方法

本研究が研究対象とする水上勉の旧蔵資料は、作家の死去からさほど経過していないこともあり大部分が未整理で、全体を網羅する資料目録は作成されていない。没後展として開催された群馬県立土屋文明記念文学館(2010「水上勉の世界」)および世田谷文学館(2014「水上勉のハローワーク『働くことと生きること』」)に代表作の原稿などが出品され、その際の予備的な調査として作成された簡易的な目録があるが、これは膨大な資料の中のほんの一部でしかなかった。資料の保存状態についての問題もあり、早急に整理・調査をすることが必要であった。

本資料群の総体は、段ボール100箱以上、資料点数はおそらく5000点を越えるものであり、その範囲も1940年代から2000年代までの半世紀以上にわたる。大別すれば、水上自身の自筆資料(原稿、ノート、メモなど)水上宛の公的・私的な書簡類 旧蔵書 遺品類となる。

今回の研究期間では、まず自筆物である水上勉の原稿、ノート・メモ類、および水上宛の書簡類に焦点を絞って優先的に分類・整理を行った。その上で、については作品名、ジャンル、制作年、決定稿/未定稿の別等、については差出人、年月日、内容といった基礎的なデータをとり、これらをデータベース化した。その際、一点ごとに画像を撮影しデータとともに概観できるようにすることを目的とした。

その上で資料の内容を個別または横断的に調査し、必要に応じて翻刻を行い、そこから判明する事実をもとに考察を進めることにした。原稿については、いくつかの個別の作品について、

未定稿と決定稿との差異から生成論的な視点から作家の創作法の検討を行った。宛書簡類については、主要な差出人の書簡を翻刻するとともに、その年代毎の差出人の傾向を分析し、作家の人的ネットワークを把握するとともに、戦後文壇の形成や広がりなどの考察を行った。

4. 研究成果

平成 28 年度は研究の初年度ということもあり、主に研究全体の基礎固めとなるような活動を中心的に行った。当初の計画にしたがい、長野県東御市の水上勉旧居への調査を平成 28 年 7 月、9 月、10 月の 3 回にわたって実施した。同地に保管されている水上勉旧蔵資料のうち、資料の状態と重要度の観点から優先順位を付け、事前に予定していた原稿・書簡・文書などのまとまりではなく、時代順に古い資料群から優先して調査を行う全体方針を決定した。そして、当該年度はその手始めとして、昭和 20 年代から 30 年代前半の資料を時代と分類ごとに整理し並べ直し、一点ごとに撮影と調書作成を行った。さらに現地で調査した結果を持ち帰り、データ入力して資料リスト作成を行った。この結果、すでにデータ化されていた世田谷文学館の調査分と合わせて約 1000 点の資料のデータ化が完了した。

以上により、これまで知られてこなかった水上勉の文壇出発期の出版活動を中心とした様々な活動の詳細を知ることができる多くの資料が発見された。具体的には水上が関わった出版社である虹書房および新潮社時代の原稿・書簡類や数々の出版資料などである。特に水上に宛てられた多くの文学者たちの重要な書簡が多数見つかり、発展的な調査および結果報告を行うための目途をつけることができた。なお、その整理および調査の概要は、大木志門「徳田秋聲と水上勉 二人の文学者資料のケースから」(「科研費研究」折口信夫旧蔵資料の調査とその評価を通じた同時代文学の資料学的研究」公開研究会、2017-03-04)として報告を行った。

また、平成 29 年 2 月には、昭和 20 年代から 30 年代にかけて水上が居住および社会的活動を行った場所(東京・埼玉・神奈川)の現地調査を行い、資料調査結果との照合を経て、水上の伝記事項について様々な点で修正・確定作業を行うことができた。

平成 29 年度は研究の 2 年目として、前年度に行った基礎的作業をもとにして、主に研究の具体化となるような活動を行った。前年度よりも現地調査の回数を増やし、長野県東御市の水上勉旧居への調査を平成 29 年 5 月、7 月(2 回)、9 月、11 月の 5 回にわたって実施した。当該年度は、昭和 30 年代以降の資料を時代と分類ごとに整理し並べ直し、これまでと同様に一点ごとに撮影と調書作成を行った。さらに現地で調査した結果を持ち帰り、データ入力して資料リスト作成を行った。この結果、あらたに約 400 点の、前年度までの調査分と合わせて約 1400 点以上の資料のデータ化が完了した。なお、前年度調査分より項目の点数としては少ないが、1 点あたりの枚数の多い原稿類の調査を中心的に行ったため、整理・撮影を完了した資料の全体量は前年度よりかなり多いものとなった。

以上により、水上勉の本格的な文壇活動期にあたる昭和 30 年代から 40 年代にかけての文学的活動の詳細を知ることができる多くの資料が発見された。特に異稿を含む代表作の草稿類が多数見つかり、より発展的な調査および結果報告を行うための目途をつけることができた。その成果としては、大木志門、掛野剛史、高橋孝次「水上勉宛田中英光書簡 18 通 水上勉資料の中から」(『昭和文学研究』75 巻)において宛書簡の一部の調査報告を行い、またその時代の水上を知る親族に聞き取り調査を行い、その結果を大木志門、掛野剛史、高橋孝次「虹書房・日本繊維経済研究所時代の水上勉 北野英子氏・奥田利勝氏に聞く」(『山梨大学国語・国文と国語教育』22 巻)として発表することができた。

また、平成 30 年 2 月には、水上の出生地である福井県おおい町で水上が自ら設立した若州一滴文庫における資料調査、さらに福井県立ふるさと文学館での資料調査を行い、福井県内における主要な水上資料の存在を確認することができた。また、おおい町では水上の生家跡や戦時中に勤務した分教場跡などゆかりの場所を調査し、その正確な場所や現状を確認することができた。

平成 30 年度は研究の最終年度であり、前年度までに行った基礎的作業をもとにして、これまでの研究活動の総括を行った。資料の所蔵者である遺族の協力のもと、前年度よりもさらに現地調査の回数を増やし、長野県東御市の水上勉旧居への調査を平成 30 年 5 月、6 月、7 月、8 月、9 月、12 月の 6 回にわたって実施した。作品の原稿や書き入れ稿を中心に資料を時代と分類ごとに整理し並べ直し、これまでと同様に一点ごとに撮影と調書作成を行った。さらに現地で調査した結果を持ち帰り、データ入力して資料リスト作成を行った。この結果、あらたに約 300 点の、前年度までの調査分と合わせて約 1700 点以上の資料のデータ化が完了した。そのうち原稿は約 750 点、書簡類は 450 点であり、その他が出版関連の資料を含む初出誌、書籍、遺品、文書類、筆跡などであった。これで、5000 点を超える水上の旧蔵資料のうち、最も主要な部分は調査を終えたことになる。

また、以上の調査の過程で、水上勉の本格的な文壇活動期にあたる昭和 30 年代から 50 年代にかけての文学的活動の詳細を知ることができる多くの資料が発見された。特に異稿を含む代表作の草稿類が多数見つかり、翻刻や資料紹介などの準備を進めた。また、水上が私小説連作『フライパンの歌』(1948 年)で文壇に登場し、社会派推理小説『霧と影』(1959 年)で二度目のデビューをするまでの文壇的空白期に書かれ、未発表のまま残された小説の草稿も複数発見することができた。その成果として、大木志門「水上勉「金閣炎上」未定稿の紹介と翻刻「金閣焼亡」から「成生岬」へ」(「山梨大学教育学部紀要」29 巻)を発表し、また前年度に引き続

く聞き取り調査により掛野剛史、大木志門、高橋孝次「浦和時代の水上勉 内田潔氏に聞く」(「埼玉学園大学紀要 人間学部篇」18 巻)を公表、さらに水上の戦後の出版活動について掛野剛史「戦後出版界の一コマ 水上勉の虹書房・文潮社時代」(日本出版学会 春季研究発表会 2018 年 5 月 12 日)において研究報告を行った。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4 件)

大木志門「水上勉「金閣炎上」未定稿の紹介と翻刻 「金閣焼亡」から「成生岬」へ」、山梨大学教育学部紀要、29 巻、2019 年、9-24、査読なし
<http://opac.lib.yamanashi.ac.jp/opac/repository/1/30340>

掛野剛史、大木志門、高橋孝次「浦和時代の水上勉 内田潔氏に聞く」、埼玉学園大学紀要 人間学部篇、18 巻、2018 年、346-333、査読なし
<http://id.nii.ac.jp/1354/00001186/>

大木志門、掛野剛史、高橋孝次「虹書房・日本繊維経済研究所時代の水上勉 北野英子氏・奥田利勝氏に聞く」、山梨大学国語・国文と国語教育、22 巻、2018 年、25-39、査読なし

大木志門、掛野剛史、高橋孝次「水上勉宛田中英光書簡 18 通 水上勉資料の中から」、昭和文学研究、75 巻、2017 年、126-135、査読あり

〔学会発表〕(計 2 件)

掛野剛史「戦後出版界の一コマ 水上勉の虹書房・文潮社時代」、日本出版学会春季研究発表会、2018 年 5 月 12 日、専修大学神田キャンパス(東京都)

大木志門「徳田秋聲と水上勉」 二人の文学者資料のケースから」、科研費研究「折口信夫旧蔵資料の調査とその評価を通じた同時代文学の資料学的研究」公開研究会、2017 年 3 月 4 日、八木書店(東京都)

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：掛野 剛史

ローマ字氏名：KAKENO , Takeshi

所属研究機関名：埼玉学園大学

部局名：人間学部

職名：准教授

研究者番号(8桁)：00453465

研究分担者氏名：高橋 孝次

ローマ字氏名：TAKAHASHI , Koji

所属研究機関名：帝京平成大学

部局名：現代ライフ学部

職名：助教

研究者番号(8桁)：20571623

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。